



をみつける  
ためには徹  
底的な話し  
合いしかな  
い。必要な  
のはコミュニ  
ケーション

6月に建築設備技術者協会の会長に就任した。「協会として、仕事の楽しさを実感できる環境をつくりたい」  
楽しさとは「良い建物が完成したときの喜びや、それまでの困難からの開放感」。自身も清水建設で設計実務を担当した18年で、「この楽しさを見いだした。もともと志したのは建築デザインの道だった。しかし「デザインは定量化できず、図面に表した考えが必ずしも評価されるわけではなかった」。数字の勝負ではないのがもどかしく、ロジック獲得のため設備分野に転向した。  
しかし、設備の世界も躯体や設備の取り合いで技術者同士の主張がぶつかり合う。最適な解



建築設備技術者協会  
新会長

のべ たつお  
**野部 達夫氏**

## 設備の仕事を文化にしたい

ン力と創意工夫と経験値。「良い建物をつくる」という目的地に着くまでは、数値化不可能な人間としての総合力の勝負だ。技術者には今、「小さな達成感の繰り返しで成長につながる。会社に帰属しながらも能動的なアクションを」と呼び掛ける。  
教鞭をとる工学院大学では学生に、建築設備を人体に例えて説明する。「設備は目や口、神経、血管など体の内側の機能全てに当たる。内臓が健全だと表情が豊かになる」と話す。また、スマートフォンを鞆にしまい、ヘッドホンを外すことを勧め、  
「建築に関わるのであれば、周りで何が起きているのか、どういう音がしているのか、あらゆることを肌身で感じていないことは」  
今後は『設備女子会』のPR強化や『設備萌え写真集』の発行を構想。設備の仕事も数値化できないが「文化にしたい」。その環境づくりに取り組む。

(金子由利亜)

【略歴】1983年早稲田大学大学院理工学研究科建設工学修士課程修了、清水建設入社。89年早稲田大学大学院理工学研究科建設工学博士課程修了。2004年工学院大学教授、14年建築設備技術者協会副会長、日本空調冷凍研究所理事長就任。東京都出身、58歳。